毎日歌壇

伊藤一彦 選

もし生きていたらスマホの蔓延を如何に言うらむ大宅壮一　吉野川市　喜島　成幸

〈評〉テレビを一億総白痴化とした大宅壮一なら今のスマホのまん延を何と呼ぶかという面白く興味深い歌。

規格外品でもおいしいですよって何度も何度も書く履歴書に　大津市　碧乃　そら

〈評〉なかなか採用されないのか。個性あふれる自分を見抜く担当者あらわれよと。

妹に姉の言葉は無視せよと諭し己の過去を振り切る　熊本市　貴田　雄介

「辞めたい」が強くなってく朝会で体調管理も仕事のうちです　松戸市　小林　里純

音楽は何度再生してもよく生まれ変わりを信じてもよく　川崎市　なつの

声高に語ればうさんくさくなる夜をつつんで静けさの雪　名古屋市　田中　靖人

花香る風に吹かれて思い出すクラス替えの日　花曇る空　大垣市　松田早百合

今はもう軍靴の音などしないドローンの音に怯える兵士　鹿嶋市　大熊佳世子

大統領が大統領を拉致してもさめた目で見る世界の民草　鎌倉市　佐々木　眞

レトルトのカレーが我が家の命綱　共働きのふたりの夜食　東京　シャルマ惠理

米川千嘉子 選

会いたいな気持ち抑えて通り過ぐ教え子の家カーテンひらり　高槻市　本宮　菜菜

〈評〉ひと声かければすぐ会えそうなのだが我慢した。成長した教え子に会いたい心情がリアル。そして、軽やかで優しい。

夜の明けてベンチの吸い殻ふとかなし何か獣の痕跡のごとく　東京　浅倉　修

〈評〉そこに居た人の心の気配そのもののように吸い殻が。下句に不思議な納得が。

戦争がまた始まった命より石油を案じて世界が揺れる　春日市　伊藤　亮

もう俺はウルトラマンか　欠勤の電話をかけに立てた3分　四日市市　早川　和博

フェレットと九官鳥が眠る庭息吹き返すがに紫陽花芽吹く　幸手市　中村　早苗

寄植えの葉牡丹の葉の薄色をヒヨたちが食む野菜不足で　日野市　西海　香子

学食で食べた日もあり昼食を老人ホームで食べる温もり　四街道市　石原　典武

義理チョコの返しに水仙届けたる遠き日もあり夢のごとしも　鹿嶋市　加津牟根夫

シリアスなドラマの悲鳴と共鳴しもう寝たはずの吾子の泣き声　大阪市　栗子守熊

火の用心マッチ一本火事の元　マッチを知らぬ子ら練り歩く　宮崎　門田　祥子

加藤治郎 選

たんぽぽぽ、たんぽぽたんぽぽたんぽぽ、たんぽぽぽぽ、ぽっと陽が咲く　東京　稲山　博司

〈評〉たんぽぽの花のイメージが音になってゆく。三句め四句めあたりでいっぱいになる。結句で解放するところがうまい。

首都高で海ほたるまで向かうのに君と私は恋にならない　東京　畑　えな

〈評〉海ほたるは東京湾のパーキングエリア。詩の言葉として生かした。切ない歌。

だるだるのパジャマが好きだ　生きるとは常にわずかな発熱である　大津市　世田　夏雪

新岐阜サウナがシンギュラリティかもしれないあいだは　こっちにいて　豊橋市　氏原　維持

北極の雪のひとひら迷いこむコンビニエンスストアのまん中　津市　川原田明子

果物の静物画よりもはかなくて影もひとつの感情になる　川崎市　新井　将

バックミラーごしに「ふ頭」の文字がとうふみたいに柔らかかった　大野城市　野分　のわ

もしかしてカスタネットと思ってる？違うよクラリネットだってば　新座市　睦月くらげ

書く文字が針のようだと知ってから刺さったままで2年後の今日　たつの市　浅水　しお

雪解けの水があんまり透きとおり一体ぼくはどうしたらいい　春日井市　月夜の雨

水原紫苑 選

麦の穂を掲げて歩む道沿いに咲く花すべて名がわからない　枚方市　久保　哲也

〈評〉麦の穂の友である作者に、道の花々は心をとざしてその名を明かそうとしないのだろうか。

さよならと口が動きぬ春空は雲ひからするゆゑのみづ色　東京　吉岡　耕大

〈評〉人間のさよならに合わせて春の空はみずからよそおう、雲を抱きしめるために。

でも右心房には一脚椅子を置き去ります誰か来た時のため　東京　境　千尋

少年は一人で話し続けます「平気なんだね」「平気じゃないよ」　岡山市　松井　度

丁寧に詩集をめくる　このなかに満ちるみずうみ揺らさぬように　所沢市　百野　芦花

偽のアリスから誘はれる兎の穴に酷似した地獄への穴　甲府市　村田　一広

白木蓮ほころんでまたほころんできみはそろそろ赦されていい　東京　山野ゆかり

神みたい　母の手が選り分けてゆく傷んでしまった苺いくつか　千葉市　芍　薬

獏、おいで　朝に蹄を置くまでの深い呼吸のひみつをみせて　加古川市　石村　まい

三十代無職夜のベッドにしがみつく『メデューズ号の筏』のごとく　熊本市　夏風かをる

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁です。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。